# レイとポケモンと珍道中

レイ・クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レイとポケモンと珍道中

【Ｎコード】
Ｎ４０２９Ｙ

【作者名】
レイ・クロフォード

【あらすじ】
オリジナルのキャラが主人公でお送りするポケモン世界の物語です。
※主人公も変です。
人から外れた主人公が嫌な方はご遠慮下さい。

## マサラタウン（前書き）

勢いで作ったら、なんか案が沢山出てきたので、続く予定です。

## マサラタウン

…自宅…

レイ
「んーお、朝か」

私はレイ。
ポケモンマスターを目指すんだけど、まずちょっと私は特殊な能力として『ポケモンと意思疏通がとれる』のだ。
あ、無論内緒だが。
あとついでだから言っておくが、『ポケモンの言葉がわかる』能力とは違うという事だ。

で、寝坊したわけで……

レイ
「急がないとポケモン貰えん！」

私は急ぎオーキド博士の家に向かった。

…オーキド邸…

オーキド
「おお、毎度お馴染みが如く、寝坊じゃな？レイ」

レイ
「あはは…まぁそれはそれとしてサトシは？」

幼馴染みの一人、サトシが来たかの確認である

オーキド
「少し前にポケモンを持っていったわい。」

レイ
「ちなみにみんなは何を？」

オーキド
「うむ、レッド君はヒトカゲ、グリーン君はフシギダネ、ブルーちゃんがゼニガメじゃ。」

レイ
「あれ？じゃあサトシは何を？」

オーキド
「サトシは寝坊したのでな、たまたま残ってたピカチュウをだな……」

その言葉に私は……

レイ
「博士…じゃあ私のポケモンは？」

オーキド
「……待ってるんじゃぞ、探してくる」

レイ
「うぉい！探してくるって事は忘れてたわけかい！？」

オーキド
「…うむ、これが多分いいかもしれない。ほれ」

と、渡された。

レイ

「ん、まぁ何にしてもありがとう。」

オーキド
「そのありがとうに含みを感じるんじゃが？」

レイ
「気のせいじゃないカナ？」

オーキド
「それはそうと……」

そういいオーキド博士は小声で私に声をかけた。

オーキド
「（小声）能力はバレんようにな」

レイ
「解ってる」

オーキド
「ならばいくがいい、あ、ほれ、図鑑。」

こうして私の旅は始まったのだった

おまけ

レイ
「そういえばもらったポケモン見てないな」

これから旅をする仲間だ
そして戦友だ

であれば挨拶を先に交わすのは礼儀だろう

と、モンスターボールからポケモンを出した

レイ
「……メタモン？」

戦闘戦術としては確実に後手に回らずをえないメタモン！？
だが、メタモンは好きなので許す。

レイ
「ではメタモン。これから共に旅をする仲になる。よろしくおねが

いします。」

すると

メタモン

「こちらこそよろしく頼むぞ、少年」

なんかダンディーなボイスだった。

メタモンだけど

.

## マサラタウン（後書き）

えーと
はい、全てのポケモンが喋ります。
無論主人公がいないと喋りませんけども
さぁて次はトキワだったな。

## 主人公の設定

～主人公設定～

◇名前：レイ
◇年齢：１０歳
◇職業：ポケモントレーナー
◇出身地：カントー地方・マサラタウン
◇容姿：白髪ロングのストレートヘア
中性的な？顔立ちの為、稀に女の子にも間違えられる事もある。
今はもう諦めてる。
◇性格：基本的には何が起きても動じなかったりする。
戦友メタモンいわく
『信頼には値する。流石は意思疏通が出来るだけはある』と述べている。
◇詳細：本作の主人公。ポケモンの言葉がわかる…のは当たり前とした、ポケモンと意思疏通が取れる能力をもった変な人。
現時点でこの秘密を知るのは家族を除いてはオーキド博士だけだったりする。

.

## トキワシティ（前書き）

うろ覚えを引っ張りだしてちまちま書いてます。

## トキワシティ

〜トキワシティ〜

自然豊かな町並みで、
近くにはニビに繋がるトキワの森、
別方向にはポケモンリーグがあるセキエイへの道。
まるで全ての始まりであり終わりのような場所。

メタモン
「実に面白い場所ではないか。マスター」

レイ
「おい」

あ、どーもトキワシティに到着しましたレイです。
…いや到着は二度目か。
変な郵便の真似事(おとどけもの)をさせられたからなぁ。
サトシめ、スルーしたな。

まぁモンスターボールが貰えたのは資金が浮いたから助かったけど…。

レイ
「で、メタモン。何故ボールから出てるのさ？」

メタモン
「理由はないな。そんな事は些末事であろうマスター」

レイ
「さいですか…」

そして私はフレンドリーショップで
トキワの森に挑むための道具を購入。

再び歩き始めた。

ちなみにメタモンは私の頭の上に鎮座している。

……

メタモン
「ところで、マスター。何処に向かっているのかな？」

レイ
「何処ってトキワの森に決まって……」

と、いいかけた私は周りを見渡し…

レイ
「謀ったなメタモン」

メタモン
「何を言う。マスターが案内板をきちんと読んでいないのが悪いのだろう？」

レイ
「言い返せないのが悔しい…」

そうなのだ、なぜかセキエイの方に歩いてたみたいなんだ。

メタモン
「もっとも、その間違いを正さなかったのは、ただ見てて飽きなか

ったのでな」

その言葉に……

レイ

「それは景色!?私!?どっち!?」

メタモン

「さぁご想像にお任せするとしよう。」

どうやらメタモンのほうが一枚上手のようだ。

……

取り敢えず気を取り直して、今度はちゃんとトキワの森に向かった。

.

## トキワの森

〜トキワの森〜

トキワ名物の自然溢れる森。
森というには弱冠小さい。
数多くの虫ポケモンが生息する事でも有名で、ちらほら虫取り少年を見かける。

メタモン
「少年の君がいうのは不自然というものじゃないかな？」

レイ
「うん。それは納得してるからツッコミは無しの方で。」

ちなみに私がトキワの森に来たのはわけがあるんだよ。
無論ニビに向かうっていうのも、れっきとした目的だけど。

レイ
「そろそろ仲間を増やしたいなぁ」

そうなんだ。
メタモンと漫才染みた対話をしてたらさ
すっかり捕まえるとか、そっちのけでさ。

メタモン
「私一人では流石にジムは越えられない」

という言葉をうけてニビにつく前に最低2～3匹は仲間を……

って……

レイ
「捕まえるのは捕まえるでＯＫなんだけどさ。メタモン、捕まえる上で相手を弱らせないと行けないんだけど…」

その、可能かな？
などと、困惑の眼差しを向ける。

が、メタモンは笑顔で。

メタモン
「何を言うマスター。敵を弱らせる必要性が何故ある？」

とか返答が来た。
…なんていう予想ｇｕｙ
…じゃなくて予想外。

それに気づく様子もなく、話を続けるメタモン。

メタモン
「他のトレーナーならばいざ知らず、マスターは我等ポケモンと会話が可能なのだ。争わず交渉で充分であろう？」

違うかな？
などと此方に返してきた。
流石我が戦友。
…そのドヤ顔はどーかと思うが。あんまり普段と変わらないけどさ。

レイ
「交渉か…なら比較的安全なのから向かっていくかな。」

コラッタは…

うん、あの歯が恐い。

ビードルは…
あの角が恐い。
まぁそれ以上に毒針に物凄い恐怖を感じる。

ピカチュウ
…は出会う事も稀だろう。
ここはスルーだ。

メタモン
「中々弱いものだなマスター。毒針には納得するが…」

メタモンも毒針は恐いらしい。まぁ仕方ない。
…ん？生息するポケモンを知ってる理由？
そりゃ、トキワ周辺で聞き込みをね。

ある人曰く、
『毒を使うポケモンも生息するから毒消しは必須だよ』
的な事を教えて貰ったわけだし。

メタモン
「だからといって毒消しで資金がそこをつきかけるのは、無様としか言いようがない。」

レイ
「面目ないです。」

あぁメタモンがとめてくれなかったら
持ち物が毒消しオンリーになっていたのは間違いない。

端からみた他のトレーナーには、手元を頭上のメタモンに叩かれた、
馬鹿なトレーナーに見えただろう。

まぁそれはそれとして……

消去法として……

レイ
「キャタピーだな。あとナゾノクサ。」

メタモン
「無難だな」

と、二人して頷くと同時に、トレーナーに戦いを挑まれないように
隠れて、隠れて、ひたすら隠れてキャタピーとナゾノクサのみを探
す私。

森じゃなければ、怪しすぎる。

???

「何してるんですかなう」

レイ

「何って匍匐前進(ほふくぜんしん)でキャタピーとナゾノクサを探してるんだって」

???

「ひゃい、に、人間が話してる…なう」

ん、そういえば、誰だ？

この声の主。

メタモンは…

ない。あのダンディーなメタモンにこんな可愛い声が出せるはずない。

うん、まず語尾があり得ない。

すると敵か！？

…と、思ったところで頭上から声をかけられた。

メタモン
「これはこれは…マスター、キャタピーが来たようだが？」

と、言われ、声の方に振り返った。

キャタピー
「ひゃうっ！み、見てるなう！」

確定。
彼女（？）が声の主らしい。

レイ
「この体勢で申し訳ない。私はマサラタウンのレイ。トレーナーだ。
んで、取り敢えずポケモンを探しに来たんだよ。主にキャタピーと
ナゾノクサをさ。」

キャタピー
「お尋ねしてもいいですかなう？」

レイ
「何かな？」

キャタピー
「その二種類なんですか…なう」

あぁ、どうあっても
「なう」は付けるんだ。

…じゃなくて、取り敢えず、その二種類を厳選した理由を話したところ……

キャタピー
「よし！私もお手伝いしますなう！」

とかなんとか話が飛躍した。

レイ
「…えっと…仲間になってくれるのは有り難いんですが…その仲間になりたいってのはどう飛躍して…」

うわっ、なんつーカミカミ。

メタモン
「フッ、何を動転しているマスター。仲間になるといっているのだ、受け入れるのが筋ではないのかね？」

あと、メタモンうっさい。

キャタピー
「貴方となら私はより一層羽ばたけるはず！」

うお、キャタピーがまるで輝いてみえる！！

トランセル
「…なう！」

って、進化時の輝きじゃん！
いつ糸はいたんよ。早すぎないか？

メタモン
「結果、どうするのかね？」

結果…

レイ
「キャタピー…いやトランセルか。トランセルよろしくね。」

トランセル
「よろしくですなう！」

と、快く、モンスターボールに入ってくれた。

よし、一匹目だ。

.

**森の途中で…**

少し道を外れてみた。
ニビに向かうのはそうだが、まだ手持ちに不安がある。
なにせ、ダンディーメタモンに、可憐なトランセル。不思議な取り合わせだ。
まぁ、ここはひとまず、
もう一匹や二匹増やすのもいいだろうという決断からなんだけどさ…

レイ
「一体この一帯で何があったんだ。」

メタモン
「マスター、別に上手くもなんともないぞ。」

レイ
「この状況下でツッコミがスムーズに出せるあたり感心に値するね」

メタモン
「お世辞はよしたまえ。慣れていない事はするものではないぞ」

という、メタモンの顔は緩みきっていて説得力はない。
で、この一帯の現状だが…なんかスピアーの群れ？っていうのかな。
それが地面に沢山寝ているのだ。

本来、森の奥にいるはずのスピアーがここにいるのも変な話だが…

レイ
「取り敢えず早々に立ち去ろう。触らぬ神になんとやらだ。」

っと後退りして…

グニッ

っと何かを踏んでしまったようで…

おそるおそる下を見ると…
やはりいましたよスピアーさん。

しかも…

スピアーはめをさました
状態になった。

あーらら～
これはもしかしなくても
危険な状態じゃないでしょうか！
取り敢えず脚を退けると共に土下座をしました。
うわっ、ポケモンに土下座とか私くらいじゃないかな！？

スピアー
「我を踏むとはいい度胸じゃないか、人間。」

ですよねー
キレちゃいますよね～
ついでに私は冷や汗駄々漏れですよ～

メタモン
「黙っていれば何かな。私のマスターが全面的に悪いと？フッ、ふざけた事は言うものではないよ。そもそも君らが地べたで寝ているのが悪いのではないのかね？」

メタモンが助けてくれた。

助かった我が戦友。

スピアー
「別に、好きで寝ていたわけではない。突然進化したバタフリーに眠らされたんだよ。我を含め全員な。」

レイ
「バタフリー…っていうと…眠り粉か。」

スピアー
「よく解ったな。」

レイ
「まぁ大体はね。」

スピアー
「…話を戻そうか。はっきり言おう。我に非はない。」

レイ
「うん、私が悪いので確定だからメタモンは下がっていいよ。」

メタモン
「そうは行かない。スピアー、君に決闘を申し込む。」

何を唐突に言ってやがりますか君っ！

スピアー
「ほぅ一騎討ちを望むか。マスターとやらそれでいいか？……といって話が伝わるわけ……」

ピタッ……

スピアーが固まった。

レイ
「スピアー？どうした……」

スピアー
「うおー！人間がしゃべってる！！」

スピアー、それは違う。
「人間が」じゃなくて
「人間と」だ。

しかもトキワの森二度目の絶叫。

…数分後…

スピアー
「はぁはぁ…」

レイ
「取り敢えず落ち着いたか？スピアー？」

スピアー
「…あぁ、なんとか」

今思ったけど
ポケモンってさ
順応性高いよね！
トランセルといい、スピアーといい。
メタモン…はいいか。

スピアー

「…おかげで落ち着いた。貴殿は何故我等と会話が出来る？」

レイ
「それは私も知りたいんだけどね」

スピアー
「ほぅ、なるほど」

レイ
「なるほど……何が？」

スピアー
「見たところ貴殿はトレーナーのようだ。どうだ貴殿、我を仲間に加えてはくれないか？」

なんですとー！

スピアー
「む？あぁなるほど。大方我が何故そう申し出るか、理由が気になるといったところだな。」

肯定の意味を込めて首を縦に振る

いやぁ察しがよくて助かります。

スピアー
「理由は簡単だ。貴殿に光を見た。我が力を添えるに充分であると判断をした。」

なんか難しいが、
なんかカッコイイ気がする台詞だな。

レイ
「うん、じゃあよろしく」

とモンスターボールを向ける

スピアー
「こちらこそ、よろしく頼む」

スピアーはモンスターボールのセンタースイッチを押し、ボールに入った。

うわぁ交渉いいね。
特にポケモンを傷付けずに済む所が特に！

メタモン
「これで手持ちは私を含め３匹。どうなさる？マスター」

レイ
「ナゾノクサはおしいが、良い意味でも、ある意味でも強力な面子になった事だし」

そこで切り、
私は高らかに拳を天に突きだし、叫んだ。

よし！ニビシティに向かおう！

と。

・

## ニビシティ（前書き）

作者はストーリーを思い出す為にファイアレッドを購入したぜ！

## ニビシティ

…ニビシティ…

マサラタウンやトキワシティのポケモントレーナー達にとっては最初の関門になるジムがある街。

他にも化石等の博物館や月から隕石が落ちてきてからピッピの目撃情報がある

『オツキミやま』があるのも見処の一つで……

メタモン

「…マスター。観念してはどうかな？見てて痛々しいにも程がある」

レイ

「メタモン言い過ぎ」

メタモン

「ならば、誤魔化さずに言えばいいのではないのかね？森をぐるぐ

る回った挙げ句にトキワシティに戻ってきた、と。」

はい、現在堂々巡りの私です。
『森というには弱冠小さい。』
とか自分で言っといてあれだけど……

確か
『森は自然の迷路』
とか言われてた気がした

なんで弱冠小さいなんて……

ボンッ

レイ
「ボンッ…ん？」

ん？何の音？

スピアー
「主よ、ニビ側出口まで送ろうか？」

レイ
「恥ずかしながら…スピアー。頼めるかな？」

スピアー
「御意に。」

……

結果、スピアーに送ってもらいました。

……

改めて

…ニビシティ…

マサラタウンやトキワシティのポケモントレーナー達にとっては……

メタモン
「そこはやり直さなくともよいのでは？」

レイ
「まぁ確かに……」

取り敢えず、休憩も兼ねてポケモンセンターに寄った。

よく周りを見渡すと、ちらほらポケモントレーナーの姿が見える

でも……

レイ
「…現時点でメタモンを持ってる人はいない…か」

あとサトシ
早いな、まだ見かけてないから、大分さきにに行ってるんだろうけど。
どっかで追い抜けたらいいんだけど

メタモン
「マスター。ニビジムの攻略はどうする気かね？まだ案がないなら、良い作戦があるんだが。」

レイ
「（小声）聞かせてもらおうか…あぁ作戦会議なら…」

と、私は他の二匹もボールから出した。

そこからメタモンによるニビジム攻略の作戦を聞くこととなり、作戦概要を概ね理解したのを確認した上でジムに早速向かった。

・

## ニビシティ　ジム戦（前書き）

ポケモンバトルのルールは一旦忘れて広い目で見ていただけたら……
中々難しい。分かりにくいかもしれません

## ニビシティ　ジム戦

…ニビジム…

文字通りニビシティにあるポケモンジム。
主に岩タイプを使う事で有名である。

レイ
「本来は水や草が望ましいけど……まぁうちのパーティーはまぁアレだから大丈夫か。」

メタモン
「では手筈通りに行くとしよう。」

そしてリーダーが現れ……

あれ？

レイ
「…たしかここのジムリーダーはタケシって人だったよな。どこ行った？」

と、そこにタケシの父がやって来た。

タケシ父
「おや？挑戦者かい？すまないね。タケシはサトシというトレーナーと旅に出てしまったよ」

またか、サトシ。
おとどけものスルーの次は、ジムリーダー拉致か？

レイ
「どうしましょうか？」

タケシ父
「まぁタケシが居なくともジムは動く。勝負だ少年。このジム初代リーダーがお相手しよう！」

なんか難易度が一気に上がったんですがっ！

サトシのせいでさ！！

レイ
「…まぁ今更だし、作戦通りにいかせてもらいますよ、ジムリーダー！」

そして一戦目が開始される。
※レイ側以外は喋りません。

タケシ父
「いけ！イシツブテ！」

イシツブテ
「イッシー！！」

レイ
「では作戦通りに。いけ！トランセル！」

トランセルは何故か空中で姿を表す。

レイ
「さらに「かたくなる」！！を連続発動！」

トランセル
「りょ、了解です。兄さま（あにさま）！」

トランセルは空中で「かたくなる」を連続で行う。
しかもボールから出た時の勢いは殺さずに……

さながらブーメランの要領で回転し、硬化し、高速で先制。

イシツブテに直撃する。

イシツブテ
「イ…イッシー…」

タケシ父
「くっ！まさかトランセルでここまで追い込まれるとは…」

レイ
「（まさか追い込めるとは…思ってなかったさ。）」

正直このヘンテコ攻撃手段。
トランセルがノリノリだったのもアレなんだけどね。

タケシ父
「だが！イシツブテは耐えた。イシツブテ反撃だ！」

レイ
「させるとでも思ってますか？」

その言葉にタケシ父は空中を見る。

トランセルがまだ空中にいた。
旋回しこっちに更に硬化して。

タケシ父
「初見ならば分からないが、二度目は食らわない！イシツブテ回避！」

イシツブテ
「イ…イッシー…」

しかしイシツブテは回避行動に移せないでいる。

レイ
「やはり、気づきませんでしたか。トランセルが一撃目、ダメージと共に「いとをはく」をしていた事に」

ちょいとイレギュラーな攻撃だけどね
サナギが糸をはくのだもの。
まぁメンツがイレギュラーだから仕方ないか。

とか思っていたら

トランセルのブーメランアタック（今命名）がイシツブテにクリーンヒット！！

イシツブテはダウンした。

が、こちらトランセルも同じ事。
トランセルもダウンした。

タケシ父
「もどれ！イシツブテ」

レイ
「戻れ、トランセル」

お互いにポケモンを戻した。

タケシ父
「まさか私のイシツブテに引き分けるとは中々のコンビネーションだな。」

と言葉は愉快に言ってるが、冷や汗をかいているのは明白だ。
トランセルのブーメランアタックなんて普通やらないし。そんなのないし。

タケシ父
「君相手に手加減は無礼だな。本気で行こう！」

レイ
「ではこちらもそれに答えましょう。」

そして二回戦開始…！！

タケシ父
「奮起せよ！イワークズ！」

ん？イワーク…ズ？

イワーク
「イワーグッ！！」

イワーク２
「イワーグッ！！」

タケシ父
「コンビネーションならばこの二匹。さぁどうする少年！」

その声に期待と不安が入り交じるのがわかる。

というか唐突にダブルバトルかい。

レイ
「ならば…遊んでやってくれ、スピアー！メタモン！」

そういい、ボールからはスピアーが、傍らからメタモンが向かう。

タケシ父
「メタモンとはまた珍しい。だが手加減は無しだ。」

その声が合図となったのかイワークが二匹前に出る。

そこに立ち塞がるのは、
スピアー。

イワーク達の進行が一旦止まる。

スピアー
「ついてこれるか？」

どう聞いても挑発でした。

イワーク側はこれを合図とし、「体当たり」を繰り出した。

それをギリギリの所で回避するスピアー。

もっともギリギリなのは、攻撃手段を減らす為の接近戦。
これだけ密着状態では別の攻撃は仲間にあたる確立の方が高い。

レイ
「スピアー！そろそろだ！回避行動に移れ！」

スピアー
「御意に。」

その瞬間、先程までのスピアーは居なかった。

高速で距離を置く回避を取った！

瞬間スピアーの後方から光のようなものがイワークにぶつかり、一匹のイワークは倒れた。

タケシ父
「今の光は…ソーラービーム」

レイ
「御名答。」

タケシ父
「だが、ここにはメタモンとスピアー。メタモンには出来るわけ…
…」

といったレイの近くにフシギダネ。

タケシ父
「そうかメタモンで手持ちを隠し、スピアーで混乱させた後、フシギダネで狙撃か。中々に卑怯くさい手だな。」

「だが、狙い目はいい」
と続けた。

だが、レイの『メタモン』は普通ではない。

その瞬間、フシギダネの変身を解いた。

タケシ父
「なんだとっ！」

驚くのは無理もない
被写体無しで変身したのだから

レイ（＋メタモン）
「「変身、それは相手を模写、真似る事の真髄にあたる。
真似るという事はその者の本質までも見極め、形にする事。
ならば被写体の有無は関係ない。理解があるならその必要性はない。
」」

らしい。

メタモンはオーキドの所で
ゼニガメ、ヒトカゲ、フシギダネ、ピカチュウの４匹と暮らしてい
た時期がある。

故に特にその４匹へは姿が見えずとも高い完成度で変身出来る。

そして変身を解いたメタモンはすかさず、イワークに変身。
イワークに体当たりをかました。

その間スピアーは後方にて構えを取る。
スピアーの右の針に光が集まっている。

その光は先程と同じ輝きで……

レイ
「メタモン！イワークを締め付けろ！」

スピアー
「行けるぞ、主よ」

レイ
「スピアー！ソーラービーム！」

刹那、眩い光が発生する。

一筋の輝きはイワークとメタモンに向かってく。

タケシ父
「みっ道連れ！？」

とか思うがちょっと違うんだよね。

刹那、メタモンとイワークを巻き込むかたちのソーラービーム。

メタモンはすかさず変身を解くことでそれを回避した。

イワーク2
「イ…イワーグ……」

バターンッ

と地響きをあげながらイワークは倒れた。

## ニビシティ　ジム戦（後書き）

ごめんなさい。きっと分かりにくかった事でしょう。
あと、スピアーの構えですが……
Ｆａｔｅのギルガメッシュ。
エアを使用するときの構えを思い浮かべて頂けたらわかるかと。

## ニビジムを終えて（前書き）

唐突ですが一部の本編キャラが本来の設定と食い違ってる部分が…

…ん？タケシ父の時点で違うって？

## ニビジムを終えて

…ニビシティ…

はい、なんとか勝ちました。
ん？作戦？
トランセルのブーメランアタックはそうだけど
メタモンやスピアーのソーラービームも予定通りに……まぁ

ダブルバトルになったのは予想外。

後でバッジを貰う時に言われたもんな。

『いやぁ年甲斐なく熱くなってしまった。はっはっは』

と。
言いながら、冷や汗をかいていたのを私は忘れない。

ところ変わってポケモンセンターです。
ポケモンは今バトルの疲れを癒す為に、そしてオツキミやまへ挑む

べく、回復装置の中。

なので独りぼっちです。

レイ
「はぁ…あいつらと会話ばっかだったから、一人ってのはなんだか寂しいもんだな。」

ささやかな時間ですが！

？？？
「ささやかなら別にいいのではないのか？」

レイ
「否定はしないよ。」

と答えてから
あぁいつものノリでつい返した事を直ぐに後悔した。

？？？
「……ケーシィの言葉…解るの？」

という女の子の声が聞こえたから。

振り返って理解した。

さっきのはケーシィで、
今のは…ナツメ…さん？

何でヤマブキシティのジムリーダーがいんのさ！

ナツメ
「…休暇」

心を読まれただって！？

ナツメ
「…超能力」

レイ
「成る程、能力化した読心術か」

ケーシィ
「汝、何故我が声が聞こえる？念話はしてないはずだが。」

レイ
「貴女方には隠せないから取り敢えず教えますよ。」
といい、心の中でスピアーやトランセルに言った内容を伝えた。

ナツメ
「よくわかった。」

ケーシィ
「そして汝に興味が沸いたと主は言っている」

ナツメ
「…ケーシィ余計な事は言わなくていい／／／」

レイ
「であれば、また出逢えますね。」

メタモン
「と、平然を装っているが、内心、先程の顔に心奪われかかっていたのではないのかね？」

レイ
「唐突な登場と共に余計な事はいわなくていい。」

と、何故か沈黙があって。

沈黙を破ったのは…
ナツメの吹き出し笑いだった。

ナツメ
「フフッ…能力的に異なる私たちだけど、なんか親近感沸くわね」

レイ
「ポケモンがお節介なところとかね。」

ケーシィ／メタモン
「「主（マスター）が奥手すぎるのだよ。そんなのでは彼氏（彼女）が出来ないではないか」」

ナツメ／レイ
「「余計なお世話です！」」

そのハモりにまたも、笑い合う。

二人は気付かない。

知らない内にポケモンセンターで一番目立ってる事に。

ちなみに気付いてるが、メタモンとケーシィはスルーしてる

ナツメ
「ケーシィの口からだけじゃ、アレだから……言うわね」

レイ
「？」

ナツメ
「貴方に興味が沸いたの。貴方がよろしければ、ヤマブキシティに戻る道中を一緒に居ても…その…いいかしら／／」

レイ
「構いませんよ。あ、自己紹介がまだでした。私はレイ。マサラタウンのトレーナーです。」

ナツメ
「レイね。私はナツメ。知ってると思うけど、ヤマブキシティのジムリーダー。呼び捨てで構わないわ。」

レイ
「じゃあナツメ。」

ナツメ
「は、ひゃいっ！」

暫し沈黙に、またなった。

数分後、

ナツメ
「失礼、取り乱したわ／／／」
取り敢えずまだ顔は赤いままだった。

が、直ぐにそれが真っ赤に変わり、ナツメが顔を覆ってしまった。

ケーシィ
「あぁ成る程」

と、ケーシィ理解。

どうやらレイは一瞬赤い顔のナツメを可愛いとか思ったんだろう
そしてそれを能力を通して直に知った為に更なる紅潮に発展したらしい。

レイ
「？」

約一名現状を理解出来てない者もいるが……

メタモン
「取り敢えずマスター。私達は回復した。先に進まないかね？」

レイ
「だね。了解。」

そして再びメタモンを頭に。スピアー達をボールのまま腰に戻し、オツキミやまの方へ向かう事にした。

レイ
「……っと、ナツメ～、行くよ。」

ナツメ
「あ、ごめんなさい」

取り敢えず、新しいパートナー（？）と共にオツキミやまへ向かうレイ一行であった。

## ニビジムを終えて（後書き）

というわけで、ナツメさんのキャラが本編と違い最初から普通です。
いや、普通じゃないか。

取り敢えず、トラウマ設定がなくなったのでサトシが別の意味で苦戦するはず！

さて、次はオツキミやま。
キャラにナツメが増えたので楽しい道中が描けるといいな。
と、思ってます。

ではでは、ここまで読んで頂きありがとうございます。

## オツキミやま（前書き）

あ、ロケット団は出なかったりします。
あと、今更ながらシゲルは出ません。
勝手ながら第一話にレッド、グリーン、ブルーというキャラが出てしまいましたので……
出番云々の関係上消えました。シゲルの立ち位置にはグリーンが当てはまります。

## オツキミやま

…オツキミやま…

ニビシティの近くにある「山」の名をもつ洞窟。
いや、実際に行き来が許されてるのはオツキミやまの洞窟だから表現が可笑しいか。

ちなみにニビシティの人いわく、
『月の隕石が落ちてから、ピッピが目撃されるようになった』
…との事である。

また、その時の隕石はニビシティの博物館に展示してあるらしい。

レイ
「あ～そうか、博物館行き忘れたのか。」

ナツメ
「私のせい？」

レイ
「いや、ナツメは悪くない。」

とかやってる背後には

メタモン
「ケーシィ、君は現状をどう思う？」

ケーシィ
「あと一歩という所かな？」

メタモン
「だが兆しはなくもない」

ケーシィ
「あぁ、私としても主達の行く末は気になるものだ。」

レイ

「言いたい事はわかったから、静かにしてくれ。私は構わないがナツメが迷惑する。」

ナツメ
「いや、私は別に…ボソボソッ」

それを見てメタモンが一声

メタモン
「まだまだ先は長いな。」

と。

……

レイ
「あ～中々に薄暗いな…ナツメ……あれ？」

気付いたらナツメがいませんでした。

レイ
「…メタモン」

メタモン
「何かなマスター？」

レイ
「ナツメがはぐれたっぽい」

そのレイの言葉に……

メタモン
「深く気にする必要はないのではないかね？彼女とてジムリーダーだ。ケーシィと一緒ならば、まず大丈夫だろう？」

ケーシィ
「ところが…私はここにいる」

レイ
「……」

メタモン
「……」

ケーシィ
「……」

沈黙が走る…

レイ
「メタモン」

メタモン
「奇遇だなマスター、同じ考えかね？」

レイ
「ああ…」

ケーシィ
「ん？どうしたのかね？」

レイ
「ナツメを一刻も速く探さないと！」

ケーシィ
「その必要は皆無だ。」

そういい、メタモンとレイを掴むケーシィ

メタモン
「成る程」

レイ
「あ～納得」

二人ともケーシィが何をしようとしてるか理解したらしい。

刹那、一人と二匹はその場からテレポートした。

……

一方その頃、

ナツメ
「本当に暗いね…ケーシィ。」

しーん……。

ナツメ
「あれ？」

試しにテレパシーを使うが通じない。

ナツメ
「まさか…はぐれた？」

まぁそのまさかだったりはするんですが。

ナツメ
「ど、どうしよう。こんな時ポケモンに出会したら……」

刹那、空中よりポケモン出現！！

メタモンがあらわれた！

ナツメ
「メタモン？」

メタモン
「おや、ケーシィ。君のテレポートも中々の物だな」

ケーシィ
「もっと誉めてもいいんだぞ？」

レイ
「この二人（？）も似た者同士といったところか……さてとナツメさ……」

ぷいっ

といった所で、レイはナツメから顔を背けた。

ナツメ
「え？レ、レイどうしたの？」

一人焦るナツメ

ケーシィ
「これが吊り橋効果か。」

メタモン
「ちょっと違うのではないかね？」

全然別のベクトルで会話をしてました。

レイ
「仕方ない」

と、此方レイさんは目を閉じ、ナツメに手をさしのべました。

レイ
「ナツメ、はやくたって」

ナツメ
「あ、うん、けど何故目を閉じてるの？」

と言いながら

手を掴む。

どうやらご自慢の超能力は現在、暗闇と焦りで使えてないみたいです。

ケーシィ
「その問いには私から伝えよう。ズバリ、主のスカートの…」

と、そこまでテレパシーで聞いた結果
理解したナツメは

「わー」

と叫びながら勢いよく立ち上がりました。

ナツメ
「…目を開けてもいいよ」

レイ
「あ、うん」

ナツメ
「えっと…見た？」

レイ
「いや、薄暗かったし…見てないよ。」

ナツメ
「嘘は…ついてないみたいだね」

レイ
「とりあえず合流出来たんだ。今度ははぐれないように手を繋いで行こう！！」

ナツメ
「え、あ、うん／／／」

こうして
レイとナツメとケーシィとメタモンは先に進んでいくのであった。

ナツメ
「（うぅ洞窟抜けるまでに赤さを無くせるかしら／／／）」

約一名、暴走仕掛けているけれど……

・

## オツキミやま（後書き）

ヤバイ、ナツメさんがどんどん可憐な少女になりつつある。

まぁアニメでトラウマを無くしたナツメさんは笑った声しか記憶にないですが。

さぁ次の話は少々飛んでハナダになります。

ではでは～

.

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4029y/

---

レイとポケモンと珍道中

2011年11月28日06時06分発行